

(2) 落葉広葉樹林から常緑広葉樹林へ

里山林であるコナラ林やアカマツ林を放置すると、常緑広葉樹が増えてきてやがて常緑広葉樹林(37頁)になる。近畿地方では実際に、アカマツ林がコジイ林に移行しつつあったり、コナラ林の下層にアラカシが増えつつある。このまま放置すれば、近い将来には四季折々に姿を変える里山林は少なくなって、身近なところは鬱蒼とした常緑広葉樹林だらけになるだろう。

最近、里山林の落葉広葉樹林が遷移してできた常緑広葉樹林を調べる機会があった。その結果、出現した常緑広葉樹種はコジイとアラカシだけであった。コジイだけが優占する林もあることがわかった。奈良の春日山の原生的な常緑広葉樹林や京都市の南西にある松尾神社所有のコジイ林とは比べようもなく、生物の多様性においてみおとりのする林であることがわかってきた。

京都大学の理学部構内にある縄文時代の遺跡の調査から、縄文人がイチイガシのドングリを採集して貯蔵していたことが確認され、当時このあたりにはイチイガシの森林が広がっていたことがわかっている。しかしまでは、イチイガシを京都盆地でみつけることはまず難しい。すでに、イチイガシの生息環境を徹底して壊してしまっているのである。母樹がないので、イチイガシが混じった常緑広葉樹林の回復はもはや無理である。

そして、落葉広葉樹林内にすむスプリング・エフェメラル(春植物)をはじめとする落葉広葉樹林の林床植物は、落葉広葉樹林が常緑広葉樹林に変わる過程で姿を消すことになる。コナラ林の林床を埋めつくしていたカタクリが、林床の手入れが放棄されたり、コナラ林から常緑広葉樹林への移行により消えてしまった例があちこちにみられる。

里山として利用されなくなった林を放置してなぜ悪いか、遷移によって落葉広葉樹林が常緑広葉樹林に変わっていくのは、それはそれとしてしかたないことではないかという議論がある。また、林が

なくなるわけではないのだからいいのじゃないかという議論もある。しかし、ことはそう簡単ではないように思われる。植物相が単純化する可能性はすでに述べたが、ニホンジカは立派な常緑広葉樹林があってもすみつかないようだ(92頁参照)。ニホンノウサギなども生活を変えなければならぬだろう。人によって本来の生息場所を奪われ、里山で生き永らえてきた生きものを絶滅から救い、日本の生物相を保全すべきではないのだろうか。

里山は日本文化の基盤である

私たちは、自らの感性を自然とのかかわりのなかで養ってきた。四季それぞれに異なった姿をみせる里山の落葉樹林と常緑のアカマツ林を背景に、水田が配置された里山の景観を美しいと思って育ててきた。また、自然の中で微妙なちがいをもち多くの味を知り、色合いを知り、風合いを知り、さまざまな感触を知りながら育ててきた。

1994(平成6)年に里山に関する国際ワークショップを開いたとき、韓国、中国、ネパールからの参加者を含む私たちアジア人と、アメリカからの留学生ともども京都の北山スギの林を見学した。アジア人は皆その美しさに心を打たれたが、アメリカの参加者は、北山の杉林は美しいとは思いますがやはりアメリカの大平原のほうが美しいといったので驚いたことがある。やはり人の感性は育った過程で接した自然によって培われているのではないかと改めて思い、彼らの発言に強い印象をもった。もしそうであるなら、ここで里山の自然を失うとすれば、私たちの感性が変わり、ひいては私たちの文化も変わるということではないか。このテーマは余りにも大きく、ここでは問題提起をするだけにとどめたいが、もし常緑広葉樹林に囲まれた自然にしてしまうのであれば、そこには国民的合意が必要であると思う。

(伊東・田端)